

パンツおじさんの諜報活動

「神明中学へ通学の朝、須磨弥吉郎が自宅前でパンツ一枚で血色のいい裸で、長刀を振っていました」。

こんな思い出を、「荻窪の記憶Ⅲ」展を見た知人がメールで送ってくれました。須磨については、昭和39年（1964年）5月8日の東京新聞も「ハダカ通す外交官」との見出しをつけ、荻窪に住む著名人の一人として紹介しています。

「須磨は近所の子もたちには『ハリキリ・パンツのおじさん』というニック・ネームで呼ばれている。（略）外交官生活で送ったワシントン、ロンドン、マドリッド、北京でも、ハダカ姿で通した。エチケットの国、英国では、さすが、往来を歩くわけにはいかないの、森のなかには歩いて散歩したこともある」

しかし、須磨が外交官としてユニークだったのは「ハダカ」だけではありません。スペインを舞台にした小説で知られる作家・逢坂剛は、「須磨公使は、当時の日本人外交官としては型破りの人物で、大胆な言動から周囲の毀誉褒貶が激しく、その評価にはプラスマイナスの振幅がある」と書いています。いったい、何が「型破り」だったのでしょうか。

舞台は、第二次大戦下のスペイン。当時、スペインは中立国だったので、連合国や枢軸国のスパイが情報収集のために暗躍していました。そんななか、情報の価値を重視していた須磨は、公使としてスペインに赴任すると、スペイン人のスパイを使って英米の情報を集め、日本に送っていたのです。スパイの名はベラスコ。「ドイツのスパイを務めながら、須磨公



須磨弥吉郎(国会図書館蔵)

1892年 秋田県生まれ
1919年 外務省入省
1924年 現在の南荻窪に居を構える
1934年 南京総領事
1939年 外務省情報部長
1941年 駐スペイン特命全権公使
1946年 A級戦犯容疑で逮捕
1953年～58年 衆議院議員
1970年 死去

使のためにも情報活動を行なった。公使は、ベラスコの情報を〈東情報〉と呼んでいた。〈東〉は〈とう〉と読み、最初は〈盗〉の字を当てるはずだったが、あまりに露骨なので〈東〉にした、と伝えられる」。その情報はアメリカ太平洋艦隊の動きから原爆開発にまでおよんでいましたが、日本政府や軍部に活用されることはなく、暗号はアメリカにすべて解読されていました。

敗戦後、須磨は「中立国の駐在外交官としてはただ一人、A級戦犯指定を受け」ますが、彼を「訴追しようとするれば、アメリカは日本の暗号を解読していた事実を、公表しなければならず、不起訴処分になっています。戦後の須磨は国会議員を二期つとめたほか、美術収集家としても知られ、スペイン駐在中に集めた美術品を「須磨コレクション」として長崎県立美術館に寄贈しています。

※逢坂剛の文章は『さらばスペインの日々』（講談社文庫）からの引用です。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男